

2020-A リサーチペーパー

沖縄の幸福度が相対的に高い 要因に関する一考察

内閣府「満足度・生活の質に関する調査」結果
の分析から

大山 雄太郎
51-198007

目次

1. はじめに.....	1
2. 幸福度研究について.....	1
(1) 用語の定義.....	2
(2) 社会指標の策定.....	3
(3) 幸福度研究の成果：幸福度の決定要因.....	5
3. 沖縄における幸福度とその要因.....	7
(1) 沖縄における幸福度.....	7
(2) 沖縄における幸福度の決定要因（仮説）.....	8
4. 検証と考察.....	9
(1) 方法.....	9
(2) (仮定1) → (事象1) の検証.....	10
(3) (仮定2) → (事象1) の検証.....	13
(4) 重要な留保.....	15
(5) 結論.....	16
5. おわりに.....	16

1. はじめに

人は誰も幸せになりたいと願っている。どうすれば幸せになれるのか。金銭的に豊かになれば幸せになれるのであろうか。幸福をめぐる議論は、古くアリストテレスまで遡れ、主に哲学の領域で扱われてきたが¹、現代では、経済学の領域においても幸福度の研究が盛んに行われている²。例えば、1974年にアメリカの経済学者リチャード・イースタリンが実証した、「経済成長が必ずしも幸福をもたらすわけではない」というパラドックス（イースタリン・パラドックス）は有名である³。

本稿は、イースタリン・パラドックスを踏まえ、「一人当たり県民所得が全国最下位の沖縄⁴は、幸福度でも全国最下位なのか。」という疑問から出発する。我が国における幸福度（主観満足度）に関する最新の調査と考えられる、内閣府の「満足度・生活の質に関する調査」の結果等によれば、前述の疑問に対する答えは単に否定するだけでは不十分で、「沖縄における幸福度は、日本において相対的に高い。」とすることができる。

では、なぜ、沖縄では幸福度が高いのだろうか。その要因について、先行の幸福度研究の成果を概観し、沖縄の幸福度に関する議論を参照しつつ、主に、「満足度・生活の質に関する調査」の結果を分析することで、一つの示唆を提供するのが本稿の目的である。結論としては、沖縄が、(1) 楽観的な社会であること、また、(2) 他者とのつながり・支えあいを大切にする社会であることを要因として仮説を立て、概ね肯定しうることを確認した。また、沖縄において、相対的に幸福度が高い一方で、まったく満足していない人の割合が相対的に高いという重要な発見もあった。

本稿の構成としては、次節で、幸福度研究について、その系譜から概説したのち、第3節で、沖縄の幸福度に関する議論を踏まえ、仮説を立てる。続く第4節で、先行研究を参照するほか、主に、満足度調査の結果を分析することで、仮説に検討を加える。第5節で、本稿の限界について触れ、今後の課題を提示し、結びとする。

2. 幸福度研究について

幸福をめぐる議論は、古くアリストテレスまで遡れるが、幸福度研究、すなわち、経済学における幸福度に関する研究（「幸福の経済学」ともいう。）は、1990年代後半に盛んになった比較的新しい研究領域である⁵。本節では、本稿における議論の前提として、用語の定義を始め、幸福度研究の端緒となった社会指標の系譜から幸福度研究の成果までを概観す

¹ アリストテレスが、『ニコマコス倫理学』で究極の目的（最高善）として「幸福」を定義し、「中庸」を唱えたことはよく知られている。橋木・高松（2018）も参照。

² その学問領域を「幸福の経済学（幸福度研究）」という。

³ 松島ほか（2013）、橋木（2013）。

⁴ 本稿では、指し示す地理的な範囲は一致するが、行政区域を意味する「沖縄県」ではなく、当該地域を示す言葉として「沖縄」という語を用いる。

⁵ フライ（2012）。本節では、主に、フライ（2012）を始めとし、小塩（2014）、大竹ほか（2010）、橋木（2012）、橋木・高松（2018）など、幸福度研究（幸福の経済学）のいわば概説書を参照する。

る。

(1) 用語の定義

幸福は、人生の究極の目標であり望ましいものであるということに異論を唱える人は少ないと思われるが、念のため、改めて確認しておく。まず、「幸福」とは、人間が生きる上で「究極の目的（最高善）」である⁶。語弊を恐れず換言すれば、幸福とは、それ自体が望ましいものとして観念されるということである。例えば、富や権力、地位、名誉、健康、容姿など、他の欲望の対象とは次元の異なる概念である。つまり、地位や権力、金銭などについては、それが手段となり得るのに対して、幸福は、究極の目的であり、手段にはならないのである。そして、幸福の性質としては、究極の目的であるとの定義から自ずと導かれるように、存在することが望ましく、また、その量を観念することができるのであれば、多いほど望ましいと考えられる⁷。

「幸福」が実際に指し示す状態（つまり、意味）としては、一般に「生活満足度」と呼ばれている生活全般に対する満足感と認識して差し支えない⁸。「幸福」と「満足（度）」を同義として用いることは、幸福度研究ではよく見られることである⁹。本稿でも、先行研究を踏まえ、「幸福（Happiness）」、「満足（Well-being：厚生、ウェル・ビーイング）」、「生活満足（Life satisfaction）」を同義として用いる。さらに細かく言えば、それらの概念に対応する主観的な感覚を強調する際に、「幸福感」・「満足感」という語を、そして、幸福感や満足感の多寡が問題となるときに、その主観的な感覚を捉える語として、「幸福度」・「満足度」を相互互換的に用いることとする¹⁰。これらが同義として用いられる理由の一つとしては、調査方法の問題がある¹¹。すなわち、幸福度を計測する際に、「あなたは幸福ですか。」という質問は、漠然とし過ぎていて答えにくい。そこで、「あなたは満足していますか。」という質問が使われるのである。（つまり、厳密に言えば、「幸福」の方が「満足」より大きな概念であるが、本稿では、基本的に同義として用いる。）

また、単に「幸福度」・「満足度」といったとき、それは主観的な概念であることは先に確認したとおりだが、本稿では、「主観的幸福度」・「主観（的）満足度¹²」（英語は Subjective Well-being）という語を使う場合もある。「客観的幸福度」・「客観的満足度」という概念と

⁶ これはアリストテレスを参照しているが、ここでは、彼や彼以降の哲学的議論には立ち入らない。

⁷ 「中庸」を説くアリストテレスとしては、幸福度を求めすぎることは、「善き生活（eudaimonia）」からかけ離れることになるため、一概に肯定することはできないが、本稿では単純化して捉えることとする。

⁸ フライ（2012）。

⁹ 例えば、OECD「Better Life Index」のHPを参照すれば、HappinessとSubjective Well-being、Life Satisfactionという3語が同義で使われていることがわかる。また、小塩（2014）やフライ（2012）も認めるところである。

¹⁰ しばしば、「幸福度」・「満足度」と「幸福感」・「満足感」は同義と認識されるが、本稿では、幸福感・満足感を指標化したものを扱うため、「幸福度」・「満足度」を用いることが多い。

¹¹ 小塩（2014）。

¹² 内閣府「満足度・生活の質に関する調査」では、「主観満足度」を用いているため、本稿でも「主観満足度」を用いるが、「主観的満足度」と同義であることは言うまでもない。

の違いを明確にするためであるが、それは、幸福度を測定または推定する際に問題となる。つまり、主観的幸福度は、アンケート調査等で幸福度の程度を数値化して答えてもらったものであり、客観的幸福度は、多数の社会経済統計など客観データを用いて把握（推定）されるものである¹³。前者は、字句どおり各人がどのように感じているかの指標であり、心理学や幸福度研究（幸福の経済学）で主に扱われてきた¹⁴。後者は、幸福か否かについての判断が外部によってなされることに特徴がある¹⁵。

(2) 社会指標の策定

古来より主に哲学の分野で研究されてきた幸福が、現代において広く注目され始めるのは、戦後の経済成長のひずみが生じ始めた 1960 年代、国内総生産（GDP）等の「経済指標」に対する新たな指標として「社会指標（Social Indicators）」の策定を図るという文脈においてである¹⁶。急速な経済開発・経済成長が進む中、環境汚染を始めとする諸問題に直面し、経済的な豊かさが全てではないという問題意識が芽生えたことが背景にあるといえよう。GDP 以外の指標で社会を捉えようとする試みは、国連の社会開発研究所（UNRISD）において始まり¹⁷、経済協力開発機構（OECD）に引き継がれた。OECD の社会開発作業部会において、新しい社会指標の策定が進められ、加盟国政府も社会指標の策定作業に取り掛かったのである¹⁸。

幸福度を含む社会指標の策定の動きは、世紀末にかけて活発になり、2000 年代には、国民総幸福量（Gross National Happiness : GNH）を測定したブータン王国を始め、各国において、社会の発展や幸福度に関する指標化が進んだ¹⁹。特に、フランスにおける経済実績と社会進歩の計測に関する委員会（通称「スティグリッツ委員会」）による提言は、注目を集め大きな影響をもたらした²⁰。OECD においても、2011 年に、スティグリッツ委員会の提言や英国の幸福度指標の影響も受けつつ、「より良い暮らし指標（Better Life Index : BLI）」を構築するに至った²¹。

¹³ 鈴木・田辺（2016）、小塩（2014）。

¹⁴ 小塩（2014）。

¹⁵ フライ・スタツァー（2005）次項で紹介する社会指標は、指標が「幸福度」を名前に冠していても、基本的には客観的幸福度の指標である。あるいは、（幸福度研究ではない）標準的な経済学における「効用（Utility）」という概念も、財を消費することで効用を増加させるという仮定に見られるように、効用の多寡が外部に決定される点で「客観的幸福度」といえる。フライ（2012）、橋木（2011）、小塩（2014）も参照。

¹⁶ 西川（2010）。UNRISD の HP においても、開発における社会的・人間的な指標の作成に関して先駆的な検討がなされたことが伺える。

¹⁷ 西川（2010）。

¹⁸ 西川（2010） p.183。

¹⁹ 松島ほか（2013）。幸福度に関する研究会（2011）「参考 1」も参照。

²⁰ Stiglitz, Sen & Fitoussi（2009）。松島ほか（2013）、橋木（2013）も参照。同委員会は、ジョセフ・スティグリッツとアマルティア・センという両ノーベル経済学賞受賞者を、それぞれ委員長、顧問に迎えたものであった。同委員会は、企業等の生産だけに注目したこれまでの経済指標に異議を唱え、家計の消費や分配における格差問題の重視を促し、生活の質を測るために必要な変数について提言する。

²¹ OECD「Better Life Index」HP。なお、BLI の結果は“How's Life?”という報告書に隔年でまとめら

日本においては、内閣府の前身組織の1つである経済企画庁において、1970年代より一連の指標群が更改を重ねながら策定されてきた。まず、1974年「社会指標」という名で非貨幣的な価値を測定する諸指標が整備された。1986年に改良され、「新社会指標（国民生活指標）」、次いで、1992年から「新国民生活指標（豊かさ指標）」として、1999年まで経済指標に表れない「豊かさ」を測定してきた²²。省庁再編後の内閣府においては、構造改革の成果を国民生活の視点から捉えることを目的に、2002年に「暮らしの改革指数」が策定され、2005年まで測定された²³。個別の指標群について詳述は避けるが、一つの特徴として、「新国民生活指標」以降、1972年から行われている「国民生活選好度調査」の結果が指標群の策定に活かされていることがあげられる²⁴。「国民生活選好度調査」は、3年毎の時系列調査において、生活の満足度や幸福度などを始め、国民生活における人々の主観的意識を調査するものだが、2011年度をもって終了した²⁵。

2011年には、2000年代後半の世界各国における幸福度指標の策定の影響も受け、内閣府において「幸福度指標試案」が作成された²⁶。「新国民生活指標（豊かさ指標）」等と同様に、「国民生活選好度調査」の結果を利用しつつ、これまでの国内及び海外の幸福度研究の成果を活かしながら、幸福度に関する指標の体系化を試みたものである²⁷。そして、2020年9月には、GDP等の経済指標では捉えられない「人々の満足度（well-being）を見える化²⁸」する試みとして、内閣府が新たに「満足度・生活の質に関する指標群（ダッシュボード）」（以下「満足度指標群」という。）を公表した。これは、2019年と2020年の2度にわたる調査を基に、生活全般の主観的満足度に影響を与えている11分野を選定し、分野毎の主観的満足度に関係の深い客観的な指標（既存の統計データより全42指標）を抽出し一覧表示したものである²⁹。

前項で説明した「主観的幸福度」と「客観的幸福度」の分類で言えば、例えば、OECDのBLIも内閣府の満足度指標群も後者に該当する。ただ、BLIにおいては、主観的幸福度がそ

れる。OECDは、2013年より、スティグリッツ委員会を引き継ぐ形で、経済実績と社会進歩の計測に関するハイレベル専門家グループ（HLEG）による活動を始め、「GDPを超える」指標の精緻化に向け、取り組んでいる（スティグリッツほか（2020））。

²² 西川（2010）、町野（2013）。

²³ 町野（2013）。また、内閣府経済社会総合研究所HP「幸福度研究について」も参照。

²⁴ 町野（2013）。

²⁵ 内閣府HP「国民生活選好度調査」。なお、社会指標の文脈とは異なるが、内閣府政府広報室（及び前身の総理府世論調査研究所）も、昭和33年度以降、毎年「国民生活に関する世論調査」において、生活に対する満足度などを調査している（内閣府HP「国民生活に関する世論調査」）。

²⁶ 幸福度に関する研究会（2011）。

²⁷ 幸福度に関する研究会（2011）。翌年以降の3か年、指標作成のために「生活の質に関する調査」が実施されたが、少なくとも公開されている情報から、試案を改定した指標（いわば確定版）が発表されたことを確認することはできなかった（内閣府経済社会総合研究所HP「生活の質に関する調査」）。（当時の政権交代の影響ではないかと思われる。）

²⁸ 「経済財政運営と改革の基本方針2020」。

²⁹ 内閣府HP「満足度・生活の質を表す指標群（ダッシュボード）」。また、内閣府経済社会システム担当（2020）「第4次報告書」によると、満足度指標群は、まさに自動車の計器盤（ダッシュボード）のように、経済社会の様子を示す指標を一覧表示することを目指している。

れを構成する一つの分野になっており、また、満足度指標群においては、客観的な指標の選定の際に、調査で得られた主観満足度が参照されている³⁰。

(3) 幸福度研究の成果：幸福度の決定要因

前項では、幸福度研究の端緒である社会指標の歴史を概観したが、本項では、幸福度研究の成果・理論について簡単に説明する。

幸福度研究の重要な役割の一つとして、個人と社会の幸福度に影響する要因（つまり、「幸福度の決定要因」）の推定があげられる³¹。主観的な幸福度はアンケート調査等により把握するのが主であるから、幸福度研究は、サンプル分析を主とする計量経済学の範疇と整理できる³²。しかし、先に述べたとおり幸福度はそれ自体が主観的な概念であるから、そもそも得られた結果の測定誤差やバイアスが大きいなどの問題もある上、幸福度の決定に影響すると考えられる要素が多くあり、その因果関係を明確にするには困難が伴う³³。したがって、幸福度と相関関係が認められている要素をもって「幸福度の決定要因」とし、以下、先行研究によって指摘されていることについて、簡単に説明する。大竹ほか（2010）などを参考に、所得、労働、性別・年齢・健康、社会的関係、パーソナリティの5つを取り上げる。

まず、所得と幸福度との関係だが、第1節でも紹介したように、所得水準や一人当たりGDPの上昇が、必ずしも幸福度の上昇につながらないという「イースタリン・パラドックス」が有名である。このパラドックスは、元は、国際比較によるものであったが、一国内の高所得者層と低所得者層の間でも成り立つことが確認されている³⁴。所得やGDPが一定水準を超えると、幸福度が逡減していく様が多く観察されている³⁵。これは、人は満足度を判断する際に周りの人や平均値と比較して決めるという相対所得仮説と、所得水準の上昇により満足度が高まってもすぐに慣れてしまい幸福度がもとに戻るという順応仮説から説明される³⁶。ここではパラドックスに注目したが、パラドックス自体に議論があるほか³⁷、経済成長が「必ずしも」幸福に影響しないということであって、所得と幸福度の相関関係は広

³⁰ このような主観的幸福度と客観的幸福度の関係や特徴を考慮すれば、BLIを「幸福度」と訳すメディアが少なくなかったり（小塩 2014）、客観的な統計データを集約したものを単に「幸福度」とする研究（鈴木・田辺 2016によると、例えば、法政大学大学院政策創造研究科坂本研究室の「47都道府県の幸福度」や日本総合研究所の「都道府県幸福度ランキング」）も存在したりするが、客観的幸福度については、一義的には主観的な概念である「幸福」の「度合い」という語はあてずに、「(幸福に関する)社会指標群」とでもいうべきであろう。

³¹ フライ（2012）、小塩（2014）。

³² 橘木・高松（2018）。

³³ フライ（2012）、スティグリッツほか（2020）、大竹ほか（2010）。そのため、幸福度研究では、幸福の決定要因を推定するあたり、統計分析手法が用いられるが、相関関係を指摘するものも多い。

³⁴ 大竹ほか（2010）、橘木・高松（2018）、フライ（2012）。

³⁵ 同上。「満足度・生活の質に関する指標群（ダッシュボード）」の策定のための調査結果においても見られた。世帯年収別の生活全般に関する主観満足度は、「2000万～3000万円」がピークで、所得がそれ以上の世帯の満足度は逡減した（内閣府「第4次報告書」）。

³⁶ 大竹ほか（2010）、小塩（2014）。

³⁷ グラハム（2013）。

く認められている。

標準的な効用理論によれば、労働は負の効用をもたらすが、幸福度研究では、失業者や引退者の幸福度を調べることで、労働と幸福度の関係を明らかにしてきた。失業者が有業者より幸福度が低いのは予想通りの結果だが、引退した者についても、同様の結果が指摘されている³⁸。就業している高齢者の方が幸福であるというのだ。また、興味深い事実としては、所得水準をコントロールした場合でも、失業が幸福度にマイナスの影響をもたらすという結果も出ている³⁹。

性別については、男性よりも女性の方が幸福度が高い傾向にあることが、多くの研究で報告されており、年齢については、年齢を横軸・幸福度を縦軸にとると、U字型を描くということが大半の研究で明らかになっている⁴⁰。また、健康は変化が大きいため因果関係を調べやすいが、健康状態によって幸福度が変化することは経験的にも推定でき、それをサポートする研究も存在するが、健康については、むしろ、それ自体が被説明関数とされることも多々ある⁴¹。

さらに、近年注目されている発見の1つとして、家族や友人、近所の人たちとの社会的関係が、幸福度に大きな影響をもたらすことも指摘されている⁴²。例えば、既婚者の幸福度が高いであるとか、ボランティアなどの社会的な活動への従事が幸福度を高めること等である。近年は、他人との結びつきや支えあい、信頼感などを意味する概念として、ソーシャル・キャピタルが幸福感に寄与し、また、社会的ショックの影響を軽減する傾向があることに注目が集まっている⁴³。グラハム(2017)において、交友関係や親類との関係が、健康、仕事、個人資産より重要であることが指摘されるほか、沖縄における幸福度を調査した先行研究においても、友人の数や行事・イベントへの参加が幸福度に有意な影響を持つことが確認されている⁴⁴。

そして、最後に、幸福度の決め手となる重要な要素として、パーソナリティ(気質)があげられる。幸福度は個人が主観的に判断するものであるから当然ともいえるが、主観的概念を主観的(心理的)概念で説明することになるという点で、上にあげた他の決定要因とは質を異にしている。何をもちて幸福と考えるかは人それぞれであり、その決定には、その人のパーソナリティが影響する。例えば、先行研究において、楽観主義と幸福度の正の相関関係が指摘されている⁴⁵。他にも、「外向性」「調和性」「誠実性」「神経症傾向」「開放性」という

³⁸ 小塩(2014)。

³⁹ 大竹ほか(2010)。

⁴⁰ 同上。

⁴¹ 小塩(2014)。

⁴² フライ(2012)。

⁴³ 小塩(2014)、カワチ・等々力(2013)。医療や保健衛生の分野での注目が高まっている。先に述べた健康の向上・維持する要因として注目されている。

⁴⁴ 金城ほか(2015)。

⁴⁵ グラハム(2013)。

いわゆる「ビッグ・ファイブ」と呼ばれる因子で把握されるパーソナリティについて因子分析を行う研究もある。橘木・高松（2018）の研究では、「神経症傾向」が幸福度と負の相関を持つ一方で、他の4つは正の相関があり、それらは所得とは独立して幸福度に影響することが示された⁴⁶。また、個々人の性格が幸福感に影響を与えるという理論は、心理学の領域でも盛んに研究されており、概ね肯定されている（ポジティブ心理学）⁴⁷。

以上では、便宜的に5つに分類して説明したが、これらの要因が相互に影響しあう場合があること、また、複数の要因が重なって幸福に影響を及ぼす場合があることに注意したい。つまり、幸福度研究においては、要因と幸福度の相関関係を統計的に見出す研究が多いが、例えば、高齢で就労している場合に幸福度が高まるなど、先にあげた要因を組み合わせで説明する場合である⁴⁸。

3. 沖縄における幸福度とその要因

(1) 沖縄における幸福度

イースタリン・パラドックスを念頭におくと、「一人当たり県民所得が全国最下位の沖縄は、幸福度でも全国最下位なのか。」という疑問が生じる。先行研究を参照すれば、答えは否である。都道府県別順位を1位とする研究もあり⁴⁹、また、順位は調査によってまちまちであるものの、複数の調査を総合的に勘案した研究では23位とされた⁵⁰。さらに、内閣府の満足度指標群を策定する際の主観満足度に関する調査結果を分析すると、生活全般に関する主観満足度（以下「総合主観満足度」という。）の平均値について、全国平均と比べて統計的に有意な差（有意水準5%）はなかったものの、都道府県別順位では9位であった⁵¹。これらを踏まえれば、冒頭の疑問に対して単なる否定の答えを用意するだけでは不十分で、むしろ、以下のように言うことができる⁵²。

（事象1）沖縄における幸福度は、日本において相対的に高い。

⁴⁶ 橘木・高松（2018）. 幸福度との相関係数は、外向性 0.29、誠実性 0.24、開放性 0.19、調和性 0.21、神経症傾向 -0.26（優位水準 1%）だった。

⁴⁷ フライ（2012）. 橘木（2011）.

⁴⁸ 要因を見つけるというよりかは、要因を組み合わせで説明できるモデルを探すというのが実態であるといえるかもしれない。

⁴⁹ 前野（2020）. 地域しあわせラボ HP「地域しあわせ風土調査」

⁵⁰ 鈴木・田辺（2016）. なお、経済指標のみならず多くの客観的統計データを総合的に勘案する客観的幸福度では、沖縄の順位は芳しくない。例えば、法政大学大学院政策創造研究科坂本研究室の「47都道府県の幸福度」（2011年）だと41位、日本総合研究所の「都道府県幸福度ランキング」（2014年）だと47位であった。

⁵¹ 当該調査は、「まったく満足していない」を0点、「非常に満足している」を10点として回答者してもらうものだが、全国平均5.89点に対して沖縄5.94点であった。結果の分析は、内閣府より入手した調査の個票データのサンプル全体（ $n=15,574$ ）の結果と、個票データから沖縄在住のサンプル（ $n=277$ ）を抽出した結果を比べた。沖縄のサンプル数が僅少になるため、標本誤差が大きくなる点（有意水準5%において、最大5.89%）に留意が必要である。

⁵² なお、幸福度については、そもそも地域間格差はほとんど現れないとする研究もある（山根ほか2008）ため、平均値の差に有意性が見いだせなかったことをもって、全国平均と差がないと結論づける必要はないと考えられる。

(2) 沖縄における幸福度の決定要因（仮説）

本項では、以下、上記（事象1）の要因を検討するべく、まずは、先行の議論を参照する。1960年代に社会指標の策定が始まった背景にある、急速な経済発展に対する疑義、そして、社会の「豊かさ」は経済指標では測れないという問題意識は、1972年の本土復帰前後から急速に開発が進んだ沖縄においても見ることができる。例えば、1973年6月に策定された名護市の『総合計画・基本構想』においては、当時の地域開発を「所得増大のみを唯一の至上目的として、その内実＝質を問うことなく強行されてきた」として一蹴し、「今、多くの農業、漁業（またはこれらが本来可能な）地域の将来にとって必要なことは、経済的格差だけを見ることではなく、それをふまえた上で、むしろ地域住民の生命や生活、文化を支えてきた美しい自然、豊かな生産のもつ、都市への逆・格差をはっきりと認識し、それを基本とした豊かな生活を、自立的に建設して行くことではないだろうか。」と訴えかける⁵³。ここに掲げられた「逆格差論」という理念は実現するもことなく挫折したとされるが、金銭的価値に置き換えられない「豊かさ」を重要視する主張は、当時の一辺倒な経済開発に対する疑義の高まりを背景にしているとはいえ、現代においても示唆に富むといえよう⁵⁴。

今世紀に入り国際的に幸福度を含む社会指標の策定が進む中、早稲田大学名誉教授（経済発展論など）の西川潤も、沖縄には一人当たり所得等では測り得ない独自の「豊かさ」があると主張する⁵⁵。西川（2010）は、沖縄の「豊かさ」を以下の4つの島言葉で整理する⁵⁶。

- (ア)「てーげー」：何でも大したことないと受け止める楽観的な人生態度。スローライフ。
- (イ)「ゆんたく」：隣人との交流を重視する生活態度。「満足」「豊か」という意味もある。
- (ウ)「いちやりばちよーでー」：親切さ、世話好きの気質。人間のつながりを大切にする。
- (エ)「ゆいまーる」：お互い様の精神、共同作業、相互協力。

これらの沖縄独自の「豊かさ」、つまり、そのプラスに評価できる特質（気質や生活様式に見られる特徴）は、2000年代の沖縄ブームによって、多分にステレオタイプカルな「イメージ」と化しているところもあろうが、学術書のみならず広く指摘されるところである⁵⁷。

⁵³ 地域開発を推し進める論理である「所得格差論」を「工業と農業の間に、中央と地方の間に大きな所得の格差が存在するので、農業をやめて工業を盛んにすることによって地方を中央の水準に近づけていこう」という福祉論的な装いをこらした経済学的論理」と指摘した。また、総合計画審議員の学識者には、山里将晃琉球大学経済学部教授などがいた。なお、1973年当時は、「沖縄復帰」記念事業とされた沖縄国際海洋博覧会にむけた整備が急速に進んでいた。

⁵⁴ 安里（2003）。

⁵⁵ 西川（2010）。なお、西川も、名護市の『総合計画・基本構想』について、現代の沖縄にとっても大きな示唆をもたらすと評している。

⁵⁶ 西川（2010）pp.203,204。同論文が収録されている西川潤・松島泰勝・本浜秀彦 [編]『島嶼沖縄の内発的發展—経済・社会・文化』藤原書店の終章（pp.373-382）も参照。

⁵⁷ 田中（2003）、原田・黒川（2008）、下川・仲村（2011）、渡部（2019）。世間に流布する沖縄のイメージは、青い海と豊かな自然、暖かくのんびりと時間が流れる「癒しの島」・「樂園」、すなわち、「幸せ」あふれる島ではないだろうか。イメージが独り歩きしているという指摘もあるが、世紀末から2000年代の「沖縄ブーム」以降、このイメージは人口に膾炙していると言えよう。

そして、これらは、何よりも地理的・自然的に、そして歴史的に規定されたと考えられている⁵⁸。国内の他地域から遠く異なる気候帯に属するという地理的・自然的特質、そして、それらに規定された独自の歴史⁵⁹の中で育まれたもの・培われたものが、現代における社会的な特質として現れているのだ。

以上の議論は、経済的な豊かさに対する、いわば真の「豊かさ」のようなものが観念されているが、本稿のテーマである幸福度との関係で言えば、幸福度の形成要因と捉えることができる。経済的な豊かさも幸福度の向上に寄与するが、幸福度を上げるのはそれだけではないという指摘である。以上の議論に加えて、幸福度研究で明らかになった決定要因（前節第3項参照）を踏まえ、(事象1)の決定要因として、次の2点を仮定したい。（なお、これら以外の要因があることを否定するものではない。）

【(結果1)の決定要因】

(仮定1) 沖縄は、楽観的な社会であること

(仮定2) 沖縄は、他者とのつながり・支えあいを大切にする社会であること

(仮定1)については、幸福度にパーソナリティ（気質）が影響する（特に、楽観主義と幸福度は相関がある）という議論と、西川（2010）の「豊かさ」（ア）から発想したものである。個人の気質を社会の特質として一般化することには注意が必要だが、単に、「楽観的な価値観を持った人（楽観主義の人）が多い」とするのではなく、社会に根差した価値観であるという意味で、「楽観的な社会である」とした。つまり、本稿では、次の（仮定2）でも同様だが、ある価値観を持っている人が多いことをもって、その価値観が共有されている社会と捉えることにする。

(仮定2)については、家族や友人、近所の人たちとの社会的関係が幸福度に寄与するという議論に加え、実際に、「ゆいまーる」の精神が具現化されたとも考えられる「模合」などのシステムが存在すること⁶⁰を念頭に導出した。これには、西川（2010）の主張する「豊かさ」（イ）（ウ）（エ）の価値観が包含されることは言うまでもない。

4. 検証と考察

(1) 方法

本節では、前節で提示した（事象1）の決定要因として、（仮定1）と（仮定2）を捉えることが適切かどうかについて検討する。具体的には、仮定1と2のそれぞれについて、二

⁵⁸ 来間（1998）。

⁵⁹ 高良（1993）。例えば、沖縄（琉球）の歴史は、その始まりから本土（日本）とは異なり、また、19世紀後半に県が置かれ日本に組み込まれるまで、幕府に従属しながらも王国体制を維持し、中国との冊封関係も維持した独自の王国（琉球王国）が存在した。

⁶⁰ カワチ・等々力（2013）。模合は、沖縄に特有の金銭的な相互扶助組織である。特に、医療福祉の両機において、沖縄固有のソーシャル・キャピタルとして模合に注目する議論もある。また、「門中」という父系の血縁集団も存在する。

段階の検討を加える。第一に、沖縄が（仮定1・2）に掲げたような社会といえるかどうかであり、第二に、そのような社会であることが（事象1）に影響を与えていると論理的に考えられるかどうかである。後者については、（仮定1・2）で描写した社会的特質と（事象1）との間に因果関係を調べることが理想であるが、本稿では、入手できるデータの制約等により、上記のような検証方法を用いることとした⁶¹。

検証に用いるのは、主に、内閣府の満足度指標群を策定する際の主観満足度に関する調査（以下「満足度調査」という。）の結果である。基本的には、内閣府より入手した調査の個票データのサンプル全体（ $n=15,574$ ）の結果と、個票データから沖縄在住のサンプル（ $n=277$ ）を抽出した結果を比べる形を取るが、沖縄のサンプル数が僅少になるため、標準誤差が大きくなる点（有意水準5%において、最大5.89%）に留意が必要である。一方で、満足度調査は、最新の大規模な幸福度に関する調査であることに加え、一般に幸福度研究において用いられる生活全般に対する幸福度（満足度調査では「総合主観満足度」とされる。）だけでなく、総合的な満足度に影響すると考えられる13の分野⁶²に関する主観満足度（以下「分野別満足度」という。）も調査しているという利点がある。

（2）（仮定1）→（事象1）の検証

本項では、（仮定1）が（事象1）の決定要因であるという（仮説1）を検討するが、まずは、沖縄が「楽観的な社会」と言えるかどうかである。満足度調査は、楽観主義を測定する調査を実施していないが、社会の楽観度を推定する指標として、「生活の楽しさ・面白さ」という分野の主観満足度を参照することができる。特筆すべきは、総合主観満足度及び他の12の分野別満足度について、沖縄の平均値が全国平均と有意差（有意水準5%⁶³）が見いだせない中、「生活の楽しさ・面白さ」に対する沖縄の満足度（平均値）は、統計的に有意に全国平均を上回っていたことである（全国5.66点・沖縄5.93点）。「生活の楽しさ・面白さ」についての満足度が高いということは、生活を楽しんでいる人が多いということの意味するだけで、そのことから直ちに楽観的な社会であると結論付けることは難しい⁶⁴。

そこで、満足度指標群に掲げられた客観指標も視野に入れて考察を加える。11の各分野において、満足度調査において各分野別主観満足度と相関性が高いとされた客観指標のう

⁶¹ 統計学で用いられる「因果関係」までを求めないのは、前節第3項で紹介した「決定要因」と同様である。

⁶² ①家計と資産、②雇用環境と賃金、③住宅、④仕事と生活（ワークライフバランス）、⑤健康状態、⑥教育水準・教育環境、⑦交友関係やコミュニティなど社会とのつながり、⑧政治、行政、裁判所への信頼性、⑨生活を取り巻く空気や水などの自然環境、⑩身の回りの安全、⑪子育てのしやすさ、⑫介護のしやすさ・されやすさ、⑬生活の楽しさ・面白さ。なお、この13分野は指標群に組み込む分野の候補であり、実際に満足度指標における分野として採用されたのは、総合主観満足度と関連性が低かった分野「⑧政治、行政、裁判所への信頼性」と、総合主観満足度と関連性が高いが、他の分野別主観満足度との関連も高い分野「⑬生活の楽しさ・面白さ」を除く11分野である。

⁶³ 以下、有意性に言及する際は、別段の記載がない限り、有意水準は5%である。

⁶⁴ 直観的には、「生活の楽しさ・面白さ」の満足度が高い人は、楽観的で人生を謳歌している人に多いと推察することもできるが、楽観的でなくても人生を楽しむことはできる。

ち代表的なものをまとめたものが、下表（表1）である。これを見れば明らかなように、多くの分野において、沖縄の方が全国平均より芳しくない。一方で、その芳しくない結果とは対照的に、主観満足度は、全国平均とほぼ同じか少し高いという状況になっており、都道府県別順位も上位や中程度ものがほとんどである。各人が分野別主観満足度を判断する際には様々な要素を考慮していると考えられるため、表1に書いた客観指標と分野別満足度が一対一で対応するわけではないが、この主観満足度と客観指標の乖離は、楽観主義の表れとみることができる。むしろ、客観的な指標を主観的にプラスに補正して捉えるというのは、「楽観主義」の定義ともいえよう。これを踏まえれば、「生活の楽しさ・面白さ」の分野別満足度が高いことも、楽観的に人生を謳歌している人の存在（つまり、楽観的な社会であること）を、一部ではあるにせよ、反映していると考えられる。

表1：客観指標と主観満足度の比較

分野	客観指標（主なもの）	全国	沖縄	主観満足度		
				全国	沖縄	順位
家計と資産	可処分所得金額（二人以上勤労世帯）	47.7万円／月	31.8万円／月	4.70	4.71	23
雇用環境と賃金	完全失業率（年平均）	2.4%	2.7%	4.66	4.73	14
	有効求人倍率（年平均）	1.6	1.19			
	所定内給与額	307.7千円	251.3千円			
	最低賃金額（※全国は加重平均）	901円	790円			
住宅	延床面積	93.0㎡	75.8㎡	5.58	5.55	27
	住宅保有率（二人以上世帯）	83.7%	62.80%			
仕事と生活	実労働時間（一般労働者）	164.8時間／月	165.6時間／月	5.26	5.32	16
健康状態	健康寿命	男72.14 女74.79	男71.98 女75.46	5.56	5.72	7
教育水準・教育環境	大学進学率	54.7%	40.19%	5.56	5.60	19
社会とのつながり	ボランティア行動者率	26.0%	25.10%	5.39	5.51	10
	交際・付き合いの時間	17分/日	19分/日			
自然環境	微小粒子状物質(PM2.5)の環境基準達成率	93.5%	100%	5.43	5.43	27
	森林率	67.2%	46.8%			
	1人あたりの都市公園面積	10.6㎡	10.9㎡			
身の回りの安全	刑法犯発生件数（認知件数）	817,338件	6,878件	5.67	5.71	23
	人口100人当たり件数	0.6%	0.48%			
子育てのしやすさ	待機児童率（=待機児童数/申込者数）	0.6%	2.80%	5.20	5.23	25
介護のしやすさ・されやすさ	受給者一人当たりの費用額（介護サービス）	194.6千円	211.7千円	4.54	4.50	31

※客観指標について、沖縄のほうが全国平均より「よい」ものを緑、「悪い」ものをオレンジに色付け。

（出典：個票データより筆者作成）

沖縄社会の楽観的な性質は、前節第1項で参照した先行研究（前野（2020）及び地域しあわせラボ（2014））により明らかにされている。それによると、「何とかなる。」と楽観的に考えている人の割合が全国一位で、かつ、そのような楽観的な価値観を許容し後押しする社会的土壌についても全国で最も整っているとされる⁶⁵。

⁶⁵ 地域しあわせラボ（2014）. 慶應義塾大学大学院前野教授の協力の下、幸福度に寄与する（心理的）要因を5つ（自己実現と成長、つながりと感謝、前向きと楽観、独立とマイペース、安全と安心）に分類し、15,000のサンプル調査から都道府県別の幸福度を明らかにした研究。5つの要因それぞれについて、回答者個人の属性のみならず地域性についても質問し、「非常に良くあてはまる」～「全くあてはまらない」の5段階で評価させ、上から二つを選んだ合計%を足し上げてスコア化する。楽観主義については、

以上により（仮定1）で描写した社会であることが肯定的に捉えられたので、次は、（仮定1）が（事象1）に影響を与えていると論理的に考えられるかどうかを検討する。まず、第2節第3項で紹介したとおり、楽観主義が幸福度と正の相関を持つことは先行研究でも明らかにされている。例えば、グラハム（2013）で紹介された研究では、ラテンアメリカとアフリカを比較する中で、楽観主義が幸福度に影響を与えることの有意性が確認された。満足度調査の結果においても、「生活の楽しさ・面白さ」の分野別満足度が楽観主義を反映していると仮定すれば、概ね同様のことが確認された。つまり、総合主観満足度と「生活の楽しさ・面白さ」満足度の相関係数は0.7763（有意水準5%で有意）である。さらに、総合主観満足度を被説明変数として単回帰分析を行ったところ、回帰係数は0.8009・決定係数は0.6026であった（表2参照）。つまり、総合主観満足度の60%以上を「生活の楽しさ・面白さ」満足度で説明でき、相関関係は有意に認められる。さらに、総合主観満足度を被説明変数とし13の分野別主観満足度を説明変数とした重回帰分析を行った結果が表3である。これによると、「生活の楽しさ・面白さ」の分野別満足度の総合主観満足度に対する影響が大きいことがわかる⁶⁶。

したがって、先行研究を参照しつつ、また、「生活の楽しさ・面白さ」分野別満足度の高さが楽観主義を反映したものであると仮定すれば、満足度調査結果の分析によって、（仮説1）は概ね肯定しうると考えられる。

表2：総合主観満足度と分野別満足度との個別の相関関係

分野別満足度	全国			沖縄		
	相関係数	単回帰傾き	決定係数	相関係数	単回帰傾き	決定係数
①家計と資産	0.6676	0.6641	0.4457	0.6944	0.6561	0.4822
②雇用環境と賃金	0.6069	0.6321	0.3683	0.5839	0.6150	0.3409
③住宅	0.5868	0.6062	0.3443	0.5515	0.5867	0.3041
④仕事と生活	0.6569	0.7044	0.4316	0.6749	0.6990	0.4555
⑤健康状態	0.5856	0.6160	0.3429	0.6673	0.7225	0.4453
⑥教育水準・教育環境	0.5804	0.6493	0.3369	0.5938	0.6689	0.3526
⑦社会とのつながり	0.5838	0.6514	0.3408	0.6614	0.7030	0.4375
⑧政治・行政・裁判所	0.4044	0.4552	0.1635	0.3924	0.4187	0.1540
⑨自然環境	0.4705	0.5463	0.2213	0.4868	0.5326	0.2370
⑩身の回りの安全	0.5068	0.5993	0.2568	0.4666	0.5483	0.2177
⑪子育てのしやすさ	0.4659	0.5373	0.2171	0.4767	0.5244	0.2273
⑫介護のしやすさ・されやすさ	0.4492	0.5443	0.2018	0.4308	0.5180	0.1856
⑬生活の楽しさ・面白さ	0.7258	0.7829	0.5268	0.7763	0.8009	0.6026

（出典：個票データより筆者作成）

個人の属性について、「いまかかえている問題はだいたい何とかなると思う」・「失敗やいやなことに対し、あまりくよくよしない」という質問、地域の特性について、「調整することを応援し、失敗を許容する地域」・「楽観的・前向きな地域」という質問である。

⁶⁶ サンプル数の少なさ故か、有意水準5%で3分野のみ統計的有意となったが、そのうち、「生活の楽しさ・面白さ」の偏回帰係数が最も大きく、影響の大きさが伺える。（なお、重回帰分析における説明変数の回帰係数は、分析に含まれる他変数の影響を除いたときの当該変数の影響を表す。）一方で、この重回帰モデルは、多重共線性の問題や欠落変数の問題を克服できておらず、統計的に有意だからと言って、「因果関係」を推定することは難しい。

表3：13分野別満足度による総合満足度の重回帰分析結果

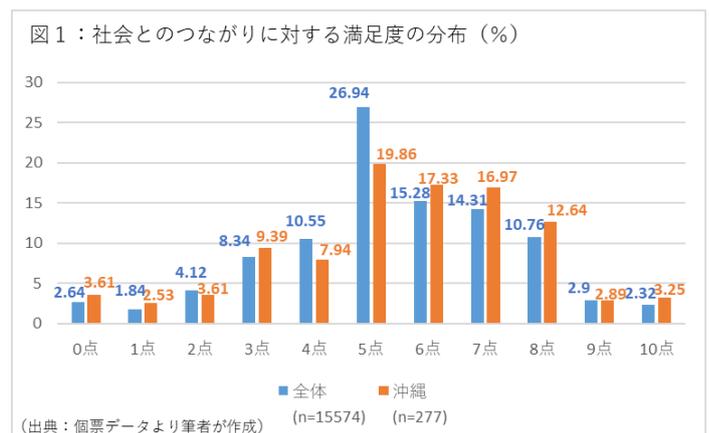
分野別主観満足度	係数	p 値
①家計と資産	0.2220	0.000
②雇用環境と賃金	-0.0340	0.580
③住宅	0.1170	0.834
④仕事と生活	0.0914	0.163
⑤健康状態	0.2387	0.000
⑥教育水準・教育環境	-0.0600	0.338
⑦社会とのつながり	0.1094	0.058
⑧政治・行政・裁判所	0.0214	0.698
⑨自然環境	-0.0339	0.560
⑩身の回りの安全	-0.0970	0.119
⑪子育てのしやすさ	0.0611	0.288
⑫介護のしやすさ・されやすさ	-0.0430	0.508
⑬生活の楽しさ・面白さ	0.4481	0.000

※調整済み決定係数=0.6810

(出典：個票データより筆者作成)

(3) (仮定2) → (事象1) の検証

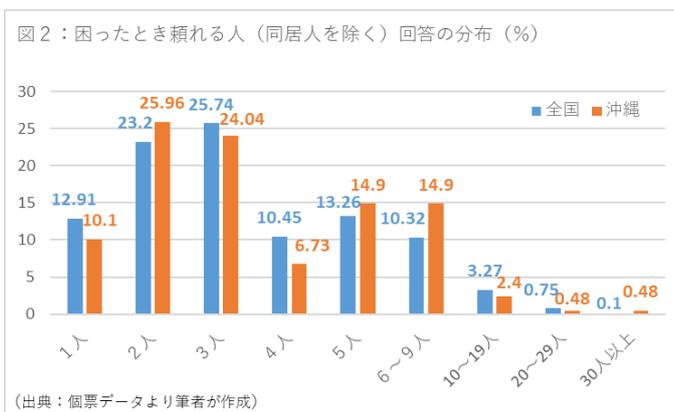
次に、(仮定2)が(事象1)の決定要因であるという(仮説2)について、前項同様、二段階で検討するが、ここにおいても、分野別主観満足度に注目する。「他者とのつながり・支えあいを大切にする社会」性の検討であるから、言うまでもなく「社会とのつながり」に関する分野別満足度である。まず、平均値については、全国と沖縄において、統計的に有意な差は見いだせなかった(全国5.39点・沖縄5.51点)。しかし、満足度の分布、つまり、相対度数(%)を比較すると、沖縄において高満足な人の割合が大きかった(7点以上の割合:全国30.29%・沖縄35.75%, 図1参照)。中央値も全国が5点であるのに対して、沖縄は6点であった⁶⁷。これだけでは、社会的なつながりを大切にする人が多いのかは判断できない(例えば、社会とのつながりが無いことに満足していると回答することも考えられる)。しかし、「社会とのつながり」に対する満足度を聞いた場合、社会的な関係を念頭に回答する人が多いと考え



⁶⁷ 分布の偏りを示す歪度は、全国-0.2848に対して、沖縄-0.4394である。中央値が全国と沖縄で違うのは、14の主観満足度のうち、唯一の例である。

られるため、模合などの社会的なシステムの存在を所与のものとするれば⁶⁸、「社会とのつながり」に対する満足度の高評価は、模合などへの評価が高いことを示唆し、「他者とのつながり・支えあいを大切にする社会」性を反映しているといえよう。

満足度調査では、より直接的に社会的つながりの有無を尋ねる質問もある。まず、「1年間のボランティア活動（PTA 活動等を含む）、自治会・町内会などの地域コミュニティの活動（趣味やスポーツを含む）などへの参加頻度」を聞く質問である。多肢選択式の回答を換算して平均値を出すと、一年あたりの頻度は、全国 10.79 日・沖縄 15.49 日であった⁶⁹。次に、「困ったときに頼りになる人（同居人を除く）」という質問に対する回答の分布は右図ようになった。1 人を選んだ人が相対的に少なく、5 人及び 6～9 人を選んだ人の割合が多くなっている（平均値は、全国 3.36 人に対して、沖縄 3.50 人）。この 2 点の観察結果は、沖縄の社会的つながりの存在について前向きに推察できる結果であり、沖縄の「他者とのつながり・支えあいを大切にする社会」性を一部反映したものとといえるかもしれない。



地域しあわせラボ（2014）の調査でも、沖縄は、親戚数や友人数等の「ネットワーク数」において全国 1 位、趣味やボランティアの所属コミュニティ数において全国 5 位であり、「他者とのつながり・支えあいを大切にする社会」性を肯定する結果となっている。

次に、(仮定 2) が (事象 1) に与える影響の検討だが、まず、沖縄県において幸福度を調査した先行研究において、友人数や行事・イベントへの参加が幸福度に有意な影響を及ぼすことが確認されている⁷⁰。そして、満足度調査の結果においても、模合などの社会的なシステムの存在を前提とし、「社会とのつながり」の分野別満足度が、「他者とのつながり・支えあいを大切にする社会」性を反映していると仮定すれば、以下のことが確認された。つまり、「社会とのつながり」の分野別満足度の総合主観満足度との相関係数は 0.6614 で、単回帰分析の回帰係数は 0.7030・決定係数は 0.4375 であった（表 2 参照）。全国における相関係数との差が、13 分野の中で 2 番目に大きく、「社会のつながり」に対する満足度と総合主観満足度の相関は、相対的に強いといえる⁷¹。重回帰分析の結果（表 3）をみると、有意水準 10%であれば、統計的に有意にその影響を認めることができる⁷²。さらに、「生活の楽しさ・

⁶⁸ カワチ・等々力（2013）によると、2006 年の模合参加率は 40.9%である。

⁶⁹ 「ほぼ毎日」「週に 3、4 回」「週に 1 回」「月に 2、3 回」「月に 1 回」「年に数回」「年に 1 回」「行っていない」から選択。一年あたりの日数に換算して平均値を出した。

⁷⁰ 金城ほか（2015）。

⁷¹ 全国における総合主観満足度と社会につながる分野別満足度の相関係数は 0.5838 である。なお、全国との差が最も大きかった分野は、健康状態である。

⁷² 脚注 66 参照。

面白さ」分野と他の 12 分野との相関が高いことを考慮した上で、重回帰分析を行ったところ⁷³、「社会のつながり」に対する満足度の偏回帰係数は 0.2220（有意水準 5%で有意：p 値 0.000）となり、総合主観満足度に与える影響度が大きくなった。

したがって、先行研究を参照しつつ、模合などの社会的なシステムの存在を前提とし、「社会とのつながり」の分野別満足度が、「他者とのつながり・支えあいを大切にする社会」性を反映していると仮定すれば、（仮定 2）が（事象 1）の決定要因であるという（仮説 2）についても概ね肯定できる。

（4）重要な留保

以上では、（事象 1）を所与としてその要因を検討したが、満足度調査の個票データを分析する中で、特筆すべき重要な発見を確認した。それは、沖縄において、0 点（まったく満足していない）を選ぶ人の割合が全国より多いということだ（表 4 参照）。全体的な幸福度である総合主観満足度のみならず、平均値で統計的に有意差が認められた「生活の楽しさ・面白さ」についても、0 点の相対度数が、沖縄の方が全国より大きいのである。同様のことが、「健康状態」に対する満足度を除く 12 分野において見られる（右表参照）。なお、「政治・行政・裁判所への信頼感」に対する満足度において、沖縄サンプルの 1 割以上の人が 0 点をつけていることは、昨今の政治情勢を反映していると言えるかもしれない。

観察結果を素直に解釈すれば、満足度が高い人と低い人に二分化しているとまでは言えないが、まったく満足していない人が相対的に多いということで、（事象 1）に対する重要な留保となり得る。本稿では、その理由についてまで検討を加えることはできないが、例えば、（仮説 1）が正しいと仮定すれば、楽観的な気質を共有しないということが、（仮説 2）が正しいと仮定すれば、沖縄的な社会のつながりに不満を抱いているということが、示唆されるかもしれない。あるいは、経済的に困窮しているとか、最近解雇にあったとか、他の理由があるのかもしれない。実際に、沖縄において、収入などにおけるジニ係数が大きいなど

表 4：主観満足度における「0 点」回答の割合（％）

総合・分野別満足度	全国	沖縄
総合主観満足度	3.7	3.97
①家計と資産	6.62	8.66
②雇用環境と賃金	6.26	8.66
③住宅	2.9	2.89
④仕事と生活	3.72	5.78
⑤健康状態	2.89	1.81
⑥教育水準・教育環境	2.56	4.33
⑦社会とのつながり	2.64	3.61
⑧政治・行政・裁判所	6.66	11.55
⑨自然環境	2.22	3.97
⑩身の回りの安全	1.9	2.17
⑪子育てのしやすさ	3.87	5.78
⑫介護のしやすさ・されやすさ	4.32	6.14
⑬生活の楽しさ・面白さ	2.69	4.33

（出典：個票データより筆者作成）

⁷³ 具体的には、「生活の楽しさ・面白さ」を被説明変数とし他の 12 分野で重回帰分析を行い、その残差（つまり、「生活の楽しさ・面白さ」満足度のうち、他の分野の影響を受けない部分）と他の 12 分野を用いて、総合主観満足度を重回帰分析した。より精度の高い分析モデルと考えられる。（これは、内閣府「第 4 次報告書」の補論で用いられている方法である。）

格差が指摘される場所ではあるが⁷⁴、ここでは、以下のとおり、留保として提示するに留めたい。

(留保1) 沖縄において、まったく満足していない人が相対的に多い。

(5) 結論

以上の議論をまとめると、次の結論を得る。つまり、主観的幸福度に注目すると、沖縄は日本において相対的に幸福度が高いといえるが、その要因としては、まず、沖縄が楽観的な社会であることが考えられる。また、沖縄が他者とのつながり・支えあいを大切にする社会であるということも一要因である可能性も示唆される。一方で、沖縄において相対的に幸福度が高いことに対する重要な留保として、まったく満足していない人の割合が全国より多いということが発見された。

5. おわりに

本稿は、イースタリン・パラドックスを踏まえ、「一人当たり県民所得が全国最下位の沖縄は、幸福度でも全国最下位なのか。」という疑問から出発し、幸福度研究の歴史や沖縄の幸福度に関する議論を参照しつつ、主に内閣府の満足度調査の結果を分析することで、上記のような結論を得た。本稿の限界は、独自の調査を実施することなく、他の調査（や先行研究）の二次的分析によっていることに起因する。サンプル数の問題から標本誤差が大きいことのみならず、仮説の検証を直接的に行いうるデータではなく、仮定1・2で掲げた社会的特質と幸福度の因果関係について統計的に推論することができなかった。そのため、前節の議論のとおり、特定の仮定の下、分野別満足度と総合主観満足度との相関関係から、要因としてふさわしいか検討する方法を取った。今後の課題としては、例えば、楽観主義がどれほど社会に根差しているか判断するには、(心理学で用いられるような) 楽観性を判定する問を用意したアンケート調査を全国規模で行い、沖縄と全国の結果を比較するということが考えられる。そして、その楽観度合いと幸福度の関係性を統計分析すれば、本稿における(仮説1)は統計的にも検証され得る。

加えて、本稿で詳細に立ち入ることができなかった(留保1)「沖縄において、まったく満足していない人が相対的に多い」ことについて、その事実の検証と要因の検討も今後の課題としたい。どのような属性の人が0点(全く満足できない)を選ぶ傾向にあるのかを究明することは、沖縄の幸福度を調査する上で意義が大きいと考えられる。また、社会の実態をより正確に捉えるためにも、第2節で紹介したOECDのBLIに加え、UNEPのInclusive Wealth(新国富)指標ほか経済指標以外で社会を捉えようとする指標全般を視野に入れた調査・研究も行いたい(例えば、幸福度との関係を究明する等である)。

⁷⁴ 内閣府「県民経済計算(平成28年度)」によると、年間収入ベースのジニ係数は、全国で10番目に大きく、貯蓄ベースのジニ係数は、全国一であった。

最後に、幸福度研究が生まれた文脈は、経済一辺倒の開発への疑義であったが、経済だけが幸福の決定要因でないことに光を当てるもので、経済成長が不要だということではないことを改めて確認したい。しかし、経済的には全国最下位の沖縄が幸福度では上位にあるという事実は、高齢化・人口減少が進む社会において、重要な示唆をもたらすといえるかもしれない。本稿が、その要因を検討することで、より幸福な社会の実現に少しでも寄与するのであれば幸いである。

【参考文献】

- 安里英子（2003）「物語が終わった後で一真の豊かさとは何かを考える」『別冊 環⑥ 琉球文化圏とは何か』藤原書店，pp.56-62.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至（2003）「主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』第74巻第3号，pp.276-281.
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎〔編著〕（2010）『日本の幸福度—格差・労働・家族』日本評論社.
- 沖縄県企画部（2019）「第10回県民意識調査報告書—暮らしについてのアンケート結果（平成30年8月調査）」.
- 小塩隆士（2014）『「幸せ」の決まり方—主観的厚生を経済学—』日本経済新聞出版社.
- カワチ，イチロー・等々力英美〔編〕（2013）『ソーシャル・キャピタルと地域の力—沖縄から考える健康と長寿』日本評論社.
- 金城敬太・伊佐玲香・伊波美咲（2015）「沖縄県における幸福度とその要因に関する考察—経済関連の変数・家族・モバイルメディアと幸福度—」『沖縄国際大学経済論集』第9巻第1号，pp.79-98.
- クライナー，ヨーゼフ（2012）（沖縄大学地域研究所編）『世界の沖縄学—沖縄研究50年の歩み—』芙蓉書房出版.
- グラハム，キャロル（2013）多田洋介訳『幸福の経済学』日本経済新聞出版社.
- グラハム，キャロル（2017）猪口孝訳『人類の幸福論—貧しくても幸せな人と裕福でも不満な人』西村書店.
- 来間泰男（1998）『沖縄経済の幻想と現実』日本経済評論社.
- 来間泰男（2015）『沖縄の覚悟—基地・経済・“独立”』日本経済評論社.
- 黒川博文・大竹文雄（2013）「幸福度・満足度・ストレス度の年齢効果と世代効果」『行動経済学』第6巻，pp.1-36.
- 幸福度に関する研究会（2011）「幸福度に関する研究会報告—幸福度指標試案—」.
- 下川裕治・仲村清司（2011）『新書 沖縄読本』講談社現代新書.
- 白石賢・白石小百合（2006）「幸福度研究の現状と課題—少子化との関連において」（内閣府経済社会総合研究所 ESRI Discussion Paper Series No.165）.

- 鈴木孝弘・田辺和俊（2016）「幸福度の都道府県間格差の統計分析」『東洋大学紀要 自然科学篇』第 60 号, pp.93-112.
- スティグリッツ, ジョセフ E.・フィトゥシ, ジャン＝ポール・デュラン, マルティーンヌ [編著] 経済協力開発機構 (OECD) [編] (2020) 西村美由起訳『GDP を超える幸福の経済学—社会の進歩を測る』明石書店.
- 袖川芳之・田邊健（2007）「幸福度に関する研究～経済的ゆたかさは幸福と関係があるのか～」（内閣府経済社会総合研究所 ESRI Discussion Paper Series No.182）.
- 高良倉吉 [編著]（2017）『沖縄問題—リアリズムの視点から』中公新書.
- 高良倉吉（1993）『琉球王国』岩波新書.
- 橘木俊詔（2013）『「幸せ」の経済学』岩波書店.
- 橘木俊詔・高松里江（2018）『幸福感の統計分析』岩波書店.
- 田中康博（2003）「風景の誘惑—文化装置としての『南国』イメージ」『別冊 環⑥ 琉球文化圏とは何か』藤原書店, pp.258-266.
- 地域しあわせラボ（2014）「地域しあわせラボレポート：ローカルハピネス No.01～03」.
- 内閣府（2020）「『満足度・生活の質に関する調査』に関する第 4 次報告書」.
- 中村和之（2018）「複数属性を考慮した都道府県別の厚生分布と地域間格差の動向」（富山大学経済学部 Working Paper No.135）.
- 名護市（1973）『名護市総合計画・基本構想』.
- 西川潤（2010）「沖縄の豊かさをどう計るか？」西川潤・松島泰勝・本浜秀彦 [編]『島嶼沖縄の内発的発展—経済・社会・文化』藤原書店, pp.181～211.
- 原田ゆふ子・黒川祐子（2008）『沖縄に住む—理想のセカンドライフの過ごし方』角川 SSC 新書.
- 樋口耕太郎（2020）『沖縄から貧困がなくなる本当の理由』光文社新書.
- フライ, ブルーノ S（2012）白石小百合訳『幸福度をはかる経済学』NTT 出版.
- フライ, ブルーノ S・スタッツァー, アロイス（2005）佐和隆光監訳・沢崎冬日訳『幸福の政治経済学—人々の幸せを促進するものは何か』ダイヤモンド社.
- 外間守善（1986）『沖縄の歴史と文化』中公新書.
- 前野隆司（2020）『年収が増えれば増えるほど幸せになれるか？』河出書房新社.
- 牧野浩隆（1996）『再考 沖縄経済』沖縄タイムス社.
- 町野和夫（2013）「地域の『豊かさ指標』開発の可能性と課題」『地域経済経営ネットワーク研究センター年報』第 2 号, pp.37-54.
- 松島みどり・立福家徳・伊角彩・山内直人（2013）「現在の幸福度と将来への希望～幸福度指標の政策的活用～」（内閣府経済社会総合研究所 New ESRI Working Paper No.27）.
- 宮里政玄・新崎盛暉・我部政明 [編著]（2009）『沖縄「自立」への道を求めて—基地・経済・自治の視点から』高文研.

森川正之（2010）「地域間経済格差について：実質賃金・幸福度」（RIETI Discussion Paper Series 10-J-043）.

山城幸松（2017）『沖縄を蝕む「補助金中毒」の真実』宝島社新書.

渡部良一・河野志穂（2014）「25年度『生活の質に関する調査（世帯調査：訪問留置法）』の結果について」（内閣府経済社会研究所 ESRI Research Note No.24）.

（WEB ページ）※最終閲覧は 2020 年 12 月 3 日。

OECD 「Better Life Index」の HP

<http://www.oecdbetterlifeindex.org/topics/life-satisfaction/>

国連社会開発研究所（UNRISD）の HP

[https://www.unrisd.org/80256B3C005BB128/\(httpDecades\)/0BBA7CA9BE5EDCF48025791F003F1B60?OpenDocument&Count=1000](https://www.unrisd.org/80256B3C005BB128/(httpDecades)/0BBA7CA9BE5EDCF48025791F003F1B60?OpenDocument&Count=1000)

Stiglitz, J.E., Sen, A. & Fitoussi, J.P.（2009）“Report by the Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress”

<https://ec.europa.eu/eurostat/documents/8131721/8131772/Stiglitz-Sen-Fitoussi-Commission-report.pdf>

地域しあわせラボ HP 「地域しあわせ風土調査」

<https://archive.issueplusdesign.jp/project/local-happiness/691>

内閣府 HP 「国民生活選好度調査」

<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10361265/www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html>

内閣府 HP 「国民生活に関する世論調査」

<https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-life/index.html>

内閣府 HP 「満足度・生活の質を表す指標群（ダッシュボード）」

<https://www5.cao.go.jp/keizai2/manzoku/index.html>

内閣府経済社会総合研究所 HP 「幸福度研究について」

http://www.esri.go.jp/jp/prj/current_research/shakai_shihyo/about/about.html

内閣府経済社会総合研究所 HP 「生活の質に関する調査」

http://www.esri.go.jp/jp/prj/current_research/shakai_shihyo/survey/survey.html